

2009年4月30日(木曜日)

学籍番号：70703179

総合政策学部3年 河村佳宏

『犯罪予防』

10章 状況的犯罪予防

・クラークによる定義

1. ある程度具体的な犯罪形態が対象で、
2. できるだけ体系的、持続的に周辺環境の管理、設計、操作することにより、
3. 犯罪に格好な機会を減らし、より多くの犯罪者に高いリスクを知覚させる

・理論的根拠

- ・・・合理的選択理論、ルーティン・アクティビティ理論、ライフスタイルの観点

・状況的犯罪予防の分類

- ・・・分類方法は動的

・状況的犯罪予防の懸念(クロフォード)

1. 公共の場における財産犯罪偏重
 2. 原因でなく症状に対応
 3. 一時的、短絡的な解決策にすぎない
 4. 保障のないかもしれない科学技術への妄信を生む可能性
 5. 防犯のみを目的
 6. 監視体制拡大の煩雑さ
 7. 社会を分裂させる
 8. 転移により犯罪の社会的集中を高める可能性
 9. 不利益な文化的影響
- + 状況的犯罪予防の分類の難しさ、不安の問題に対応していない

・事例研究

11章 コミュニティ ポリシングとパートナーシップ

・コミュニティ ポリシングの定義

・・・定義は色々だが、一般に「地域社会の関与」を積極的に活用し（「地域本位」）治安の「問題解決」を志向し、また従来型の逮捕のみを目指すのではなく犯罪予防のための様々な施策を行うという警察の「目標見直し」などが、各定義に共通の特徴

・コミュニティ ポリシングの誤解

・・・地域と市民の間により関係を構築するだけ、警官を分散させて配置するだけ、などではコミュニティ ポリシングとはいえない

・・・伝統的な警察業務の補完的アプローチ

・様々なパートナーシップ活動

15章 三次予防の最新アプローチ（電子モニタリングの部分）

・電子モニタリング（EMS）

・利点

- 1．矯正施設の過密状況緩和
- 2．仮釈放した者の監督能力強化
- 3．安価な費用
- 4．中間的処罰としての射程
- 5．拘禁するよりも望ましい
- 6．対象者は社会とつながりを持てるので、社会復帰促進効果

・課題と懸念

- 1．適切な運用における細かい業務増加
- 2．監視レベル増加の恐れ
- 3．対象者の社会への早期復帰による国民に対するリスク増加

・利用及び効果の評価、EMSの将来